

復活(5)～(7) 太陽系の外側

HP「無有日記」

<http://www1.odn.ne.jp/mu-mew/>

復活(5)

1. 「再生」から「復活」へと、時空超えの列車を乗り継ぐようにして辿り着いた、この「復活(5)」。人としての経験枠の中に在る思考の質の、そのあるべき姿への変化は、「人間」や「仏陀の心」「太陽の音楽」に任せ、ここでは、人間時間を余裕で眺める次元からの発想を楽しむ。そして、そこに在る、地球にとっての再スタートの時に、この地球に生きる一生命として参加する。それは、これまで一度も無かったこと。ここに無有日記が存在することのその意味が、新たな経験創造の時へといざなう。遊び心を普通に、子供心そのものになる。

10 億年以上も厳しさを強いられ(受容させられ)、大変な中に居て、今もそうである地球。そのことを冥王星や火星などの他の惑星の異変と、その影響などを絡めて、EWを重ねつつ書いてきているが、この地球が、他と違ってどうにか持ちこたえて来たことを考えれば、この地球から発信する地球感覚の(地球そのものの)原因によって、天体規模の望むべく変化が生まれるであろうこと(可能性)を感じ取れる。

地球のために出来ることを考える低次の世界を遠くに、ただ地球が嬉しい自然体の自分を普通に生きる。自分の内なる原因(心の性質)と同じような人がたくさん居れば地球は直ぐにでも変わる、そんな自分を生きる。そして、地球になる。

2. 地球を大切に思う時、人は、地球の気持ちになる。そして、彼が何より感じて欲しいことを共に感じるそのことの大切さを思う。それは、地球に生きている人間の普通。

こと。大きな役を担ってくれた太陽に感謝し、地球の個性を貴く思う。

そして、この「復活」の原因で、奇跡という名の普通を押し上げ、太陽系のその本来へと動き出す道を確認にする。この地球(地上)に残ったままのあらゆる病みのその土台(原因)は、それにより姿を無くす。その懐かしくもある新たな地球で、そこに居られる人間は、生命そのものを普通に生きる。他の天体も、そこに居る衛星たちも、一緒になって、太陽時間を元気に生きる。太陽系全体が、ふわふわとして、柔らかく輝き出す。(by 無有 11/21 2018)

いつの日か、みんなが元気になり、またいつものように、太陽と遊ぶ。それぞれが個性を更新し、生命体としての表現を、共に生かし合い、重ね合う。回りながら回る。笑いながら歌う。みんなで乗る太陽系で、仲良く宇宙を旅する。

8. 何億年もの間、太陽系は本来ではなく、元に戻ろうとする力も無いまま、不穏な様を馴染ませる。人間の住む地球もそうで、地球は、その人間によって、本来の姿を見失ったまま不自然さを生きる。

人間でありながら、その本質(原因)は全くそうではない、嘘の人間。太陽系を我が物顔に支配しようとする存在は、本格的なその決め手となるその時のために、心も感性も無く、人としての健全な知恵も(原因への)責任も備えない形ばかりの人間を、蛇絡みの経験を通して増やしに増やし、彼らをその格好の道具とする。

頭を常に働かせ、考えることからでしか動けないその人間たちは、それを不要とする本来の人間には恐ろしく異様となり、地球も、要らない負荷をかけられる。その嘘の人間たちによって作られ、増大する、LED とその負の威力。異常さを普通とする彼らを通して、この現代を、地球の無生命化へのその完璧な負の原因にしようとする、その凶悪な存在の動きに、太陽系は危機感を覚える。

しかし、そうはならない(させない)ための原因をずっと積み重ねてきた生命たちの、そんな時でも余裕で原因で居続けるその人間時間における確固たる姿に、それは(危機感)は安心に変わる。そう、全ては分かっていたこと。その時が来るまで分からないでいられる原因は、太陽系の外側から始めて(始まって)いた

地球は、かつて共に過ごした月が、生きる力を失くし、自ら回り続けることを止めてしまったその姿を記憶に残す。それは、地球にとって、最も辛く、悲しい出来事。そのことを感じてみる。

出来る、出来ないの次元を離れ、それで何が生まれるのかという思考も外し、ただそれを感じてみる。一度もそんなことを考えることもなかったこれまでの経験全てから、そのことは、これからの経験を自由にする。そして、経験が変わる。

新たなその経験は、気づけば思考が柔らかくなる時を引き寄せ、感情も、思うようにはならないその重石を外す。そして、余裕と安心が主導権を握る。地球の悲しみを思うという、それまでに無いそのあり得なさは、脳の中の記憶(の性質)を解放し、頭を使わず、(地球と繋がる生命本来の意思に)頭を使わせる原因の働きを馴染ませていく。

そのことで、それまでとは異なる内なる世界を感じる自分が居る時、地球は嬉しい。地球の安心は、植物を中心に生命の原因が循環する、地球に生きる生き物たちと微生物たちとの自然な融合と変化。その自覚もなくそうである彼らの次元に人間が加わることは、地球の望み。地球のことを普通に思えるその姿は、そのまま、人間が生み出したこの地表での負の連鎖を決して次には繋ぐことのない原因となる。

3. そして、地球が何より嬉しいことを共に思う。それは、月が回ること。かつてのように月が元気に動き出すこと(かつては 11 時間 10 分程で自転していた)。人間がそれを思うというその姿に、地球は、予期せぬ感動を覚え、涙目になる。それ程嬉しい。記憶の中の辛い経験は、そのまま無くてもいいところへと引っ張る

うとする力を感じ、それだけでも充分な、安堵の時をそこで過ごす。

何億年も、止まったままの月の存在を前提に時を連ねて来た、地球。それを動かそうとする発想自体、それは非常識となり、経験としても、どここの思考とも繋がり得ない。それだから良い。そのことで生み出される原因は、どこまでも自由。そのことの意義も影響も、一切無視される次元のものであるゆえ、その中で遊ぶ。どこにも無い性質の思考を時間と重ねる。

月が回り出すことは、あり得ない現実だけど、月が止まったことも、あり得ない現実。地球も、どうしていいか分からない中に居る。しかし、どんなことも、始まりは、それまではどこにも無かった、あり得ない動きや発想から。現実には、それがどんなであれ、その元となる原因がそこには在る。その原因になってみる。この今の発想を、この地球発の新たな原因として、積み重ねていく。

原因は、形が無いけど、その原因に見合った現実には、次なる時のその必要性の次元に付き合う。その必要性も、基は原因だから、それが地球(という次元)にとって大切なものであれば、必ずそこへと原因は動き出す。これまでを思えば、何百万、何千万年先でもいい。その始まりが、今、ここで確かな原因となれば、それで充分。形はずっと先でも、その時のための原因になれば、そこまでのこれからが違ふ。つまり、すでに月が回っている現実の、ずっと手前のその始まりの時を生きるということ。その今が、ここに在る。

4. 月が自ら回り出すための準備運動が、数百万年先のその時に向けて始まった。どんなことがあっても決して本来を失うこと

ったからこそ担えたことと、その原因が勢い良く流れだすことの経験を以て、深くからの安心の時をここに迎える。

一生命としての本来を普通に生きるという、人間らしい人間の、その驚く程の(数の)少なさ。地球を腐敗させるためにそれだけ力が入っていたことの現れでもあるそれ(歪な数の力)は、そのほんの少しの人間の、その無限の原因の力で空疎となる。太陽の外側から始まった追跡劇は、そんな風にして、事を成し得る時をぐんと引き寄せせる。この時代が要らないものばかりで出来ているということを普通に知る普通の人間たちによって、未来は、異常さと無縁の時空のそれとなる。

7. 太陽系の外側から見た時、そこには調和と友愛と、力強い生命の躍動が在る。どの天体も、個性豊かに時と遊び、思い思いにその意思表示を楽しむ。太陽を中心に回り続ける、ただそれだけで嬉しいその時の連なりは、何百万、何千万年という、人間時間では永遠の彼方となる時空を普通に創造する。

地球は、その中に居て、人間は、その地球の中に居る。太陽は、地球を生かし、人間は、地球に支えられる。他の天体との違いは、ただ地球が経験した、地球ならではのそこでの原因。動植物たちが育ち、人間が生きるという、他には無いその特性も、それは偶然のような必然。それが自分だけだっただけ。

その地球と共に、地球の望みに応えつつ生を繋いだ人間によって、地球は、生き活きとした顔を見せ、地球らしさを手にする。その変化に、他の天体も呼応し、太陽は、ここぞとばかり、生命力の源(原因)を送り出す。人間は地球。その中身は太陽系。人間を生きる生命たちの姿は、太陽系の外側から、輝いて見える。

6. 太陽系の復活のために、地球が自身を守ろうとして生み出した、動植物たち。それでもどうにもならない時へと引っ張られる中、各天体での仕事を経て、人間という経験を始めた、宇宙の意思の分身のような生命たち。それらは、太陽系の外側からは、奇跡中の奇跡となる出来事。地球にとっても、それは予想すらしなかった驚きの現実。

地球の、これまでの在るべき原因の道を遡っていくと、太陽系に入り込んだ非生命的な脅威によって火星が大きく力を無くしたことが、地球での生命たちの誕生に繋がり、地球が無生命化の意思に尽く侵されたことで、人間は、満を持して登場する。そうでなければその全ては存在せず、この現代に至るこれまでの地球の歴史も皆、そこでの必要性によるものであることが分かる。そして、今のこの地球の在り様。その宇宙のどこにも無い姿は、太陽系の外側のどこから見ても、面白く、限り無い希望と期待を膨らませるものとなる。

その必要性が深くから変化して行くこれから。その全てがこの時までのものであったから、必要性という意味も役割も大きくその質を変えて、新たな次元の流れへとそれは乗る。つまり、地球感覚という、生の基礎を持たない存在は皆、自動制御のようにしてその姿を持ち得なくなるということ。何もせずとも地球が本来となる中で、自然界は、不自然さの原因からなる物や形を(人間も)普通に処理し、無きものにしていく。

地球自然界にとって異物となる物や価値観を生きる力とする、形ばかりの非生命的な原因の姿(人間)。その性質に永いこと付き合い、その全てを受容してきた地球と生命たちは、そうであ

の無かったこの地球からそれが動き出したことを、太陽は誇らしく思う。その無限の働きかけに、他の天体も刺激される。

木星と土星は、その原因の力添えとなれるよう、自らの中心のその生命力(磁場)を少しでも高め、太陽に余裕を与える。火星は、お荷物にならないよう、余計なことはせず、ただじっとそのまま奇跡の時を待つ。

かつて、他の天体に大きな負荷をかけてしまう立場をやむ無く引き受けさせられてしまった、火星。それに充分耐えていても、力を落とさざるを得なかった、木星と土星。そして、地球の辛い経験。月が動くためのその後方支援の立場にいる彼らのその真剣な姿に、金星の意識は変わる。その経験から、彼が覚える責任は、他よりもずっと大きい。

結果的に地球に強大な影響を与えてしまった、金星。どうしてもならない状況とはいえ、地球に無くてもいい経験をさせ、月が止まるその原因も、その多くが自らを通して作り出されてしまった。

何億年も経った今でも止まったままのその姿は(かつては一周 163 回自転していた)、他に負の影響を及ぼす材料となり、地球が最も負担を覚えさせられる存在として、そこに在る。その不健全な引力(重力)により、太陽の光も少なからずその力を削がれ、地球を困らせる。金星は、そうである事実を受け止める力を持ってないまま、厳しさばかりを募らせる。

5. そのことに、水星も緊張と責任を抱く。事の手前には、自分の力の無さがあったこと。やむを得ない経験であっても、太陽系全体の調和が元には戻れないままのその原因でい続けてしまっていること。太陽の一番近くで、太陽に最も影響を及ぼし続ける水星は、月が動くという地球発の原因が自分の場所(のかつての

原因)を通る時に、それまでのままでいることがないよう、力が入る。

だからと言って、何かが出来るわけではない。ただ、その意識を強め、その次なる原因に真剣に加わる。太陽からの光を力に、自らの回転を少しでも速くさせる核を取り戻すこと。そうであろうとし続け、その時へと向かう。かつては余裕で 15 時間程で自転していて(公転時の自転回数は 233 回)、小さいながらも、滑らかな天体間の動きにおいて担うものは大きかったという記憶を持つから、その再生の時を思う。

月と水星、金星は、衛星と惑星の違いはあっても、その状態は、それ程変わらない。それぞれの核は、その役を失い、生命体としての天体の力は無い。本来の磁力(磁場)も力無く、自転もゼロ(と違ってよい)。公転は、太陽(地球)が、そこに居続けられるよう、引き連れ、回していると言える。

その 3 つは、それぞれが順に、同じような経緯を辿り、停止状態となっている(それを仕向けた存在にとって、地球の姿はあり得ない現実だが…)。そして、地球は、金星の変化を望み、太陽は、水星が元に戻ることを願う。それが月の自転には不可欠で、月にとっても、そのことで、その可能性はより高まることになる。月が自ら回ることへの地球発の意識(原因)は、密に重なり、増幅する中で、水星と金星の、それぞれの太陽と地球との関係性を調整する流れを生み出す。

と、簡単に文章にしているが、その原因の働きかけは、人間の思考の次元を遥かに超える。それでも、文字にし、その域には無い EW を続け、人間が触れ得ない次元の(人間にとって重要な)その原因の動きを促す。原因のままの原因の世界が言葉になること自体、実のところあり得ないことだから、言葉が伝え、形にし

地球の外側には、太陽系の時空が在り、そこでの出来事を感じ覚的に知ること、人は地球に無いはずのものから容易に自由になれる時を創り出す。問題事の次元は姿を消し、そうであろうとする負の原因も力を無くす。太陽系の原因の世界に触れる経験は、無くてもいい世界のその元となる、太陽系の外側の原因からも、人を自由にさせる。

そして、普通に感じ取れるのは、不要に抱く不安や怖れの感情が、地球に負担をかけてしまうということ。人間の世界に無くてもいいものは、当然、地球にも要らないもので、それを地球を病ませようとする意思是嬉しい。健康も平和も、地球自然界の本来の姿だから、そこでの違和感となる不安(の原因)を人間世界で生み出さないことは、地球に生きる人間の、その生の基本条件となる。

ただそれを知り、実践するだけでいい。すると、世の嘘が居場所を失くす。偽善も不公正も権力も力を無くす。元々この地球には無いものを基とするそれらは、不安や怯えを燃料とする地球の異物。元を辿れば、太陽系に在ってはならない歪な意思を原因とするものだから、その次元が、この先もそのままであることはない。

不安を材料とする問題事や病気関わりの世界というのは、それを良しとする不穏な数の力で支え続けられるという、重量級の負の原因をその土台とする。当然それは、地球の意思に逆らい、太陽系の望みにも抵抗するもの。そして、その全ては、消えて無くなる流れ(変化)に乗る。その土台の主が居場所を無くしていくわけだから、それは普通。太陽系の原因が癒され、調整されて行くこの時、人間は、自然界の生命たちと同じように、地球感覚の生を自然に生きる。

宇宙は、太陽系の各天体に意識体を送り、そこでの経験全てをそのまま受容させて、時を待つ。その時、地球は、他とは異なるテーマを受け持つ。それが、この地球特有の力に支えられた、あらゆる原因の具現化(物理化)である。

天体規模の腐敗を愉しむ存在の、その全ての負の原因を受容・把握した地球は、人間という次元を招き、太陽と共にそれを形にして、新たな原因の時を創り出す。人間となった生命(意識)たちは、調和と友愛の原因を普通感覚で拡大させ、宇宙空間で好き放題破壊を繰り返していたその意思に、強力な刺激を与える。天体規模の非生命的な行為の、その人間時間(地上)版が、そこで繰り広げられることになる。

人間の次元には、太陽系の惑星皆が居て、太陽もそこに居る。人間でありながら、天体でも居る生命たちのその生命源からなる経験は、ここで「再生」となり、「復活」となって、この「太陽系の外側」の時を導く。後ろにも前にも繋がる場所を無くしたその存在の危うい意思(原因)は、ここからの EW で、限り無く無くなっていく。太陽系から出ることも出来ず、太陽系のどこにも見えなくなるそれは、気づけば、元居た場所(宇宙の外側)で、宇宙のことも忘れる。

5. 不安も怖れも、争いも衝突も、それらの原因は皆、この地球には元々無かったもの。地球に無いものは、太陽系のどこにも無いから、それらの全ては、太陽系の外側からムリやり持ち込まれたものとなる。無くてもいい経験の歴史を遠くに、人間は、初めて地球人としての道を歩む。人間は(人間であれば)、不安や争いの次元に居続けることは出来ない。

ようとする世界を通して、そのことによる何気ない(原因の)変化を楽しむ。それだけでいい。

原因を普通に生きる生命本来の風景では、知ることは、その時まで知らなくても良かった知っていることのその確認作業のようなものとして在る。全ては原因。どこまでも、どんなところにも多次元的に繋がる、原因の営み。「復活」は、ここでのそれが、太陽系の原因と繋がっただけ。易しい表現で、未来に、その、この時の経験を繋ぎ、地球を本来にする(負荷が外れて楽に公転でき、一周 373 回転ぐらいになる)。月も、他の天体も、それに参加する。

6. この地上に初めて人間が登場した時、彼らの元となる生命の意思は、地球だけでなく、太陽系の他の天体の状態も当然知り、それゆえに、逃してはならないタイミングとして、2 億数千万年前のその時の出現を選ぶ。

望むべく意思を持つこの「復活」の原因は、それがどれだけ昔のことであっても、必要とすべくそこでの原因の風景と融合し、それ以前との違いを見せる新たな原因の出来事に触れる。人間誕生のその時の背景には、すでにそれまでの太陽系の姿が、その原因の中に在る。

最初に人間としてこの地球に現れた数千の生命たちの中には、ある別の仕事をすでに終えて来ている 10 人程の存在が居て、その彼らがこの現代に集まったことで、この「復活」がこうしてここに形になる。

現代におけるそれぞれの姿は、EW の必要性から、ここに至る数千年の負の歴史のその原因を反映させるものとして、変化・変種に富んでいるが、そこには、生命としての類ない真剣さと覚

悟がある。自分たちにしか出来ない役を担うために、あらゆる性質(次元)の負荷に抵抗せず、不自然さを普通とする世界からの嫌悪(違和感)やそこでの自分たちの異常さを受容する。

人間の形を持つ前、彼らは、太陽系の主な天体と、自らの意識体(原因の意思)を重ねるといふ、地球でのその人間経験の準備要素を備えるべく仕事を、それぞれが担う。地球も、太陽系の一つの天体。その地球が、非生命的な影響を被るきっかけとなった、他の天体のその歪な経験(の中身)を把握することは、地球にとっても、太陽系全体にとっても、とても貴い経験。共に協力し合い、支え合って、それぞれは、各天体とひとつになる。そして、そこでの全てを内なる世界に潜め、他の仲間と、この地球で初めての人間経験を始める。

7. 人間が居なくても平和で健康的な地球であるはずなのが、そうではなくなってしまったために、その原因を処理し、地球を元の状態へと戻すために地上に姿を見せた、人間。その生命としての人間の基本を知れば、争いも病気も(不安も怖れも)、無くてもいいものであることが分かる。動きの無い結果(過去)や形式にこだわるのが、その基本への抵抗であることを理解する。

人間の仕事は、それらをさらりと無くし、その上で、地球自然界の不自然な原因を浄化すべく、生命としての原因を生きること。何かのために向かうことも、頑張ることも、そのことへの拒否反応。どうにかしなきゃと思考を忙しくさせることも、偽り(欺瞞)の姿。ただ普通に人間を生きればいい。

地球に生きるというのは、太陽系の営みに、一生命として参加しているということ。その地球に地球らしくない風景があれば、当

3. 人間の経験を活かして地球仕様に生み出された、水や土を無生命化させる程の LED の光は、地球に生きる生命たちを時間をかけて確実に死滅へと向かわせようとする意思を、その原因に備える。その性質は、まさに太陽系に入り込んだかの存在のそれと繋がり(同質で)、その事実、何億年もの時を経てやっと迎えることの出来た、その終わりの時を意味する。

恐ろしく凶悪な破壊力を持つその光が誕生したことで、その大元となる意思の力に届かせ得る新たな原因は創り出され、これまでの原因の浄化のその経験(の原因)を通して、それは、天体規模の仕事をするに至る。それこそ、地球と地球に託された人間たちの望んでいた機会。その時に辿り着けた喜びを共にし、耐え続けた天体たちも安堵する。

LED 照明が生まれるずっと前からその凄まじい負の力の原因を感じつつ、この無有日記の時に生を合わせて集まった生命たち。未来地球にとって最も重要なこの現代に生きる彼らによって、地球は救われ、太陽系は復活する。もちろん、それも普通。その始まりは、人間時間では永遠の昔となる、遙か彼方の次元での太陽系の外側。そこそこが繋がった。

4. 「復活」の手前を簡単に書いてみる。それは、漫画のような、遙か遠くの原因の実。

太陽系の外側の宇宙空間で、追跡劇を繰り広げていた際、凶暴さのかたまりのようなその姿無き存在は、偶然、太陽系に紛れ込む。宇宙の調和を守る意思は、太陽の協力を得て、その存在に好きなようにさせ、そうであることで可能となる宇宙規模の仕事の重要さを、太陽と共有する。

の全てを記憶することで、それを、その存在の破壊の意思の把握とその原因の浄化の手立てとする。

各天体に送られた意識(生命)は、そのままそれを携えて、地球がその準備を整えてくれた時に人間となる。それまでの時の記憶は大いに活かされ、再度その原因を(逆方向から)通り抜けて太陽系の外側へと戻り、そこから、宇宙の外側へとその負の原因全てを送り出すその(時の)ための浄化を実践する。

何が起きても、どんな風に病まされても、太陽の力を借りてそのままの地球の姿に、その存在は焦り出す。その時々の原因全てが浄化されてしまうことによる、それまでと同じようには行かなくなるその活動は、より強力・凶暴となり、それは、「復活」の内容へ、そして「再生」での形ある経験へとなっていく。

そして、その存在の意思が人間の形を手にした時、彼らの思惑は、終わりへと向かう。人間経験は、真を持たない彼らには、どこまで行っても真似事。どんなに狡賢く破壊・征服の意思を強めても、人間本来という次元に普通に在る生命としての知恵には、そのどれもが足元にも届かない。潰し切ったようでも、人間の芯(心)は生き存え、腐らせても、何度も健全な感性は再生する。自由に(無限に)、柔軟に、人間の普通によって、生命の意思は表現される。

そして、その度にその原因は記憶され、その全てが浄化される時を経て、彼らは(変化・成長とは無縁の)結果だけの世界にしか居られなくなり、生命世界の次元の中で異物となる。数を増やしても、量に頼っても、それらを力にしようとするそのことが、その自覚もなく(何も分からず)地球の外側へと押し出される道を自らが作り出すことになり、そのどうにもならなさの中で、彼らは、思わず LED 照明を世に送り出す。

然その対処に自らを活かし、太陽系の調和と安心に繋がる原因を、共に支えようとする人間(自分)が居る。

自然界に生きる動植物関わりの地球規模の異変は、地球がその自浄力を低下させてしまう程の危うい事が、地球の外で起きたことの現れ。太陽時間におけるそこでの原因の形が数億年分の一に縮小されて文字になった「復活」は、それへの働きかけを可能とする、そのための原因の知識。遊び感覚で、楽しみながら、それを自らに染み込ませる(組み入れる)。そこからでしか始められないことがある。

8. この「復活」が形になり得たその事実は、受け手の中で、力強く、きめ細かな原因の仕事をし続け、事を本来へと変え得る流れを生み出していく。地球が嬉しい原因の始まりがここには在り、太陽系も、そのことに反応する。それを普通とする生命たちは、そのまま、自らの原因を天体規模の変化へと響かせる。

「復活」の内容は、どの箇所を読んでも、これまでの知識世界には無かったものばかり。知識(結果)から始まる次元を遠くに、原因を動かす、原因だけの知識が、そこには在る。知識世界の重石を外し、好きなように、これまでになかった変化の時を経験する。掴みどころの無いはずの次元が、気づけば、自分のものになる。

「復活」を、生命としての存在のその芯(核)とすれば、その周りには、「再生」が在り、その外側には、「仏陀の心」と「太陽の音楽」「人間」が在る。空間としては、「復活」のテーマ(太陽系)は大きく外側となるが、原因の次元では、内なる世界の、その中の中である。人間時間に地球時間が付き合い、そこに太陽時間が顔を覗かせる。内と外がひとつになる。

復活は、甦るということ。「復活」は、その原因の仕事を負うということ。この地上で初めて人間となった生命たちの、その時のそれぞれのひとつの意思が、永い時を経て、ここに形になる。そして、復活が始まる。すでに、いくつもの未来が、この今の「復活」の原因(の光)を受け取る。(by 無有 11/11 2018)

復活(太陽系の外側)

1. 限り無くどこまでも被る全てを受容し、それでもどうにか持ちこたえる中で、新たな原因を生み出しつつ生き存えた地球。何億年もの間、そうであり続けることでしか成し得ないことを太陽に支えられながら実践する地球は、人間誕生の時を機に、少しの余裕を手にする。大きな仕事を終えて人間の形を持った生命たちは、その時から始まる地球時間での経験を、ずっとこの時を待ち望んでいた地球の意思と重ねる。終わりの始まりが、そこで動き出す。

太陽系を破壊しようとするその存在は、衛星や惑星を持つ天体(恒星)のそれらとの自然な繋がりと調和ある関係性を尽く嫌い、その全てを無きものにしようと、宇宙空間を好き放題暗躍する。しかし、それが許されるはずは無く、生命の永遠の変化と創造の原因の力を守ろうとする宇宙(生命体)の根源と繋がる更なる意思は、その存在の行動を抑え込んで、二度とそうにはならないよう、その力を宇宙の外側へと追い出そうとする。

ところが、なかなか上手く行かず、いつまでもその時が訪れずにいた時、その破壊の意思は、それまでと同じように行動を起こす中、新たな対象として太陽系を選び、そこに入る。

そのことが、なんと大きく事が動き出す力強い原因へと変わる。太陽が潜在させる(銀河の異端児級の)無限の能力を、その存在は知らない。

2. 宇宙の調和と自由な変化の様を支え続ける意思は、その時、すかさず太陽系の各天体(惑星)と意識を重ね、そこでの経験

を持つ。それは、この数千年の間に(この地の)人間が作り出した、地球の異物となる、不穏で不自然な負の(病みの)原因である。

人間は、元々思考を取るに足りない次元のものとして、形ある知識や経験の世界を遠くに、自らが生きる知識となり、生命としての経験となって、互いにそれらが行き交うという関係性を普通とする。その普通が基礎にあれば、そこには隔たりも不安も支配も無いため、人は病むことを知らず、争いも衝突も経験の外側となる。つまり、あらゆる性質の病みは、思考からなるものであるということになる。

その人間の基本を持ち合わせながらも、それを活躍させることの出来なかった人たちのために、無有日記は在り、彼らによって成され得る地球規模の癒しのために、この「復活」が在る。思考が元となる病みは、廻り回って自然界に負荷をかけ、地球の姿を不自然にする。それがそのままの理由が蓄積すれば、天体規模の不調和の原因ともそれは繋がり得てしまう。

力強く微細な原因を変化に乗せ、その分母を大きくすることで可能となる、病みの逆噴射のような、ここでの EW。「復活」の次なる風景には、そのことで、これまでの負の原因全てが付いては行けず、地球は地球らしく、そこでの人間は人間らしくなる。時代の必要性も、その質を変調させ、次なる時代(未来)の必要性と軽快に重なり出す。時の流れが、変化し続ける永遠の、その生命の次元へと旅をする。(by 無有 11/17 2018)

復活(6)

1. 地球に生きる一生命としての人間本来を普通に生きるという、生きる原因の質のさりげない安定。そうであるための原因を力強くするために、思考から始まる動きを遠くに、思考の手前で動き出す自然な原因の働きに思考を付き合わせる。その本来がそのままである時、その人の生きる原因は、地球の生命力のそれと繋がる経験を普通とし、他の生命たちと共に、地球を支える。それは、人間の、その人間らしい原因の形。

そこでは、思考が生命としてのそれとなり、過去(結果)を引き連れる歪な(非生命的な)思考は、どこにも無い。分からないままにいられる次元とも自由に遊び、その意識もなく為し得ることを、自然体で楽しむ。言葉(思考)も記憶も通用しない動植物たちの世界は、一生命としてのその人間の姿に安心する。

その生命としての思考(人間)をも包み込む世界からいくらかも流れて来る、この無有日記の原因。「復活」も、この辺りで、その具現化の密度を高める。確実に時を変え得る材料として、全く非常識とされることを形にし、それを 6 章とする。無限の仕事をし続ける原因で、歪な普通のその大元となる負の原因を砕く(浄化する)。

それと遊び、好きなだけ変化の時と戯れるために、人間発の、地球規模の処方箋という名の、これ以上無いふざけた話を、心の風景に、仲間として招き入れる。

2. 地球を覆った、水星、金星の時とその質を同じくする、重く、粘着性のある姿無き物質(粒子)は、地球のしぶとさに対し、しつこ

くその密度を強め、繰り返し何度もその無生命化の働きかけを重ねつつ、永い時を経て、地中へとそれは染み込んでいく。

その後、地表全体が凍り付く時を地球は経験するのだが、その間、地球は、厳しい状況に耐えながらも、その地球に在り続けるはならない腐敗型の原因をどうにかしようと、そのための自浄活動を内部深くで活発化させる。

その正念場とも言える動きで、地球は、その物質の特性を可能な限り把握し、そしてそれを外へと押し上げるのだが、あらゆる知恵を駆使しても、どうにもそれは上手く行かず、それでも、一億年以上かけて、その粒子に潜む負の原因を形に固めて、ある種の鉱物の姿へとそれを変形させるところまで事を成し得る。そして、どんなに時間がかかっても、後にその鉱物の無生命化の原因を辿って、一連の破壊力のその元となる意思へのEWが可能となるであろう道を生み出す。

地表が凍るという経験は余りに酷な状況であるが、そうであることへのそれまでに無く強力な対処という新たな経験が、思いがけず、天体規模の浄化へと繋がる原因となって、太陽系を刺激する。全てを受容し、それでも事を変化に乗せる、そこに在り続ける確かな意思のその原因は、この地球の中心から、永遠に流れ出し続ける。

3. 地球が溶け出したその時から、地球は、太陽と共に、新たな生命誕生の下地づくりを加速させ、微生物たちに、そのための活躍を促す。その一番の理由(目的)は、地球の生命力に負荷をかけ続けるその物質に、より細かく対応するため。決して放っては置けないその無生命化の意思を確実に浄化する(力無くさせる)ために、そこに在る全ての負の原因に対処し得る材料を生

LEDの原因が浄化され出すことで、大きく動き出すもの。そこから始まる、地球発の原因の働きかけ。重く、動きの無い生(原因)を本質とする存在たちが、多数の力で地球の無生命化に協力するLEDの世界は、数の力を不要とする次元のその原因の変化により、確実に力を無くす。

地球自然界にとって存在してはならないその世界の原因(を支えるこれまで)に付き合ってきた生命たちは、二度と通らなくてもいい道を歩んで来ているゆえ、今回のこの今の経験を以て、地球の望みに期待以上に応える。地球は、自転も公転も(その姿も)本来となるべく変化に乗り、月を癒し、金星と水星を元気にする。他の天体も、地球によって、自力を呼び覚まされ、生命たちは、新たな時のそれらへと再び足を運び、遊ぶ。太陽系全体が活力を取り戻し、少し膨らみ出す。

地球に居る以上、その流れに逆らえないことを知る人は、大多数の歪な次元を離れ、まともな人間を生きる。自らの本質を知り、そこから、本来という原因を着実に自らと重ねていく。そうであれば、皆仲間。「人間」や「仏陀の心」の世界が日常の普通となり、人間時間における新たな性質の時を、共に生きる。地球の中で、「復活」が勢い良く回転し出し、太陽も安心して、太陽時間を更新する。

8. 考えて分かることの世界には、考えなければ分からない原因がしつこく留まるゆえ、感じるままに心ある風景を創り、それを普通に支えるという、地球感覚と繋がる人としての原因は、そのどこにも無い。事の良し悪しも、状況による価値判断も、全て知る知らないの経験枠内でのことであるため、そこでは、その意識もなく非生命的な現実が生み出され、自覚の無い非人間性が力

テルルを通る原因の働きは、地球のためとなる生き方を普通とする人のためであり、そうではない人にとってのそれは、どうにも耐え難いものとなる。太陽を退け、水や土の生命力を奪う、無生命化の光(LED)に無頓着な多数は、その本質が元々この地球のそれではないため、それにより、これまでになかった厳しさを経験する。地球が安心を覚え、太陽系が本来へと動き出そうとする時、それを阻もうとする意思と繋がる不穏な存在たちのその原因は、居場所を無くす。

遊び心と限り無い知恵を持つ太陽と地球は、この「復活」に乗る天体規模の原因をどこまでも応援し続ける。生命のチャンスとなるこの時代の、この時に、思考の域に姿を見せた、石灰石とテルルの原因。優しさも愛情も無く、身勝手な(非生命的な)存在感をかもし出し続ける金の次元が、確実に浄化され出す。

7. 現在、地球にとっても最も辛い経験となるのは、動植物たちの生きる自由と、水と土と空気が壊される、LED。それがこの現代に生み出されるという、そのあり得なさは、地球も太陽も承知で、他の天体も、その様子を見守る。そこに在る、万全で完璧な破壊の意思。その原因深くに、太陽系を病ませた存在は居る。

生命たちにとってこれ以上無い危機状況である現代は、地球を物化させようとする力も巨大で、この数千年の間に、よりそれは具体化する。しかし、その全ては把握されていて、それだからこそ、こうしてここに無有日記が在る。全ては無有日記の原因を中心に回り、その中に、地球の生命力と密に繋がる知恵もある。かつて各天体と意識体を重ねた生命たちもここに居て、その時の経験をここで活かす。

み出す。そこに微生物たちが深く関わり、海が、その力強い支え役となる。

その手段となる物質は、後に何千万年もの時をかけて形成された石灰岩(石)。以前は存在しなかったそれは、同じように地球には無かった、停滞と腐敗の原因を備えるかの物質の出現により、地球発の知恵を力に生み出される。

その元となる、殻を持った海棲生物は、地球が最も辛くさせられる存在への浄化力を備える生命として、その確かな前段階となる基礎の時を皆で経験する。そこに在る原因は、そのまま地球の意思。全ての生命の源となる海が形となったその鉱物の力により、地球は、生き存える力を強くする。

4. 地球が、時の必要性を形に、その登場を要した、石灰岩(石)。それは、無生命化の意思と繋がる鉱物の中の、その鉛成分への浄化作用を備え持つ。

そこに在るだけで、不穏で不健康な風景へと、その空間の質を変え得る原因を持つ鉛。その成り立ちが、天体の動きを不自由にさせる程のその負の威力への(地球の)抵抗からであるゆえ、そこに在る姿無き破壊の力は、他に何も分からせずに、生命たちの自然な動きを滞らせて、簡単に本来の変化を止める(不安定な核を力に本来を変異させる)。それは、その原因が土と融合できない(土に還ることのない)肉食動物の、その腐敗型の連鎖の原動力となる。

そこに在るだけで、それなりの仕事を充分し続ける石灰石であるが、それでも万全ではない時が連なる中で、地上には、動物たちが姿を現し、後に、やむ無く人間が誕生する。そして、地球の切なる望みを具現化する数千の生命たちを中心に、時代は流

れ(「再生」)、生命と非生命それぞれの原因が対峙するという、奇跡という名の普通のその時を、この現代に迎える。

生命を生きる普通の人間たちは、石灰石の意思を自らに通し、地球の普通を繋ぐ。その原因深くで、月や金星の悲しみを浄化する程の EW を重ね、人間にしか出来ないことをする。鉛の中に潜む負の原因を限り無く砕き、地球を本来にする。

5. 何億年もの永い時を経て、奇跡的にこの無有日記の在る時代を引き寄せた、地球の意思。それが意味するのは、この今は、地球に託された人間たちが、地球のための原因となる仕事を最大級に表現する時であるということ。そして、そのことで顕になる、それを阻もうとする人間のその本性(無意識の意思)を通して、次々とこれまでの負の原因は浄化され出すということ。

そのために、「人間」で心の主導権の握り直しをし、「仏陀の心」で真を自分と重ね、そして「太陽の音楽」で、要らない経験のその原因が外れる道を創る。「再生」では、この地における生命の歴史のその内実を常識の域に収め、それを通して意識を広げた「復活」では、全ての元となる太陽系の(天体たちの)原因に触れる。

数百万(数千万)年先には、この地球の生命力も絶えてしまうその負の原因を強める存在が居れば、数百万年先でもずっと元気な地球の、その力強い原因で居続ける。そうであることもあたり前に時を癒し、自然体で、自然界と共に変化に乗る。そして、水や空気と自由に戯れ、光といつまでも遊ぶ。

地上(地表)での不自然・不調和は、地球が嬉しい生き方無くして確実にその原因を変え得ることは出来ないという、原因深くからの何でも無い普通。その地球が最も嬉しい、地球が本来で

史があり、「再生」の次元がある。そして、この「復活」の時、人間がより地球そのものとなるための経験のその原因が増幅する。人間がこの地上に居ることの意味は、そのことで限り無く広がり出す。

「復活」の世界に理由もなく安心を覚え、次なる未来地球への期待と希望がその感覚と重なる時、テルルという言葉のその原因を自らとする。それは地球感覚の芯を通る、地球の意思(生命力)のそのひとつの形。生命食(全粒穀物食 etc.)を普通に原因で居続けてきたこれまでをその土台に、新たな人間時間の材料として、それは仕事をする。

地球感覚を永遠に知ることのない存在たちによってこの数千年の間に生み出された、それまでには無かった、様々な非生命的な感情と心無い出来事。その要らない経験の中で染み込まれたそれらの(記憶の)原因を、テルルの本質は中和し、切り離す。不安も差別心も、病気も支配欲も、この地球には異物。石灰石を基とするその物質の原因の力により、地球と共に生きる生命たちは、本来を力強くする。その理由はどこにも無い。ただそうである事実を普通とする存在たちの中で生まれるその理由が、好きなだけ活躍する。

6. 生命としての原因を高めるために必要なものは、全粒穀物食や無有日記との融合を通してすでに揃っている。石灰石への理解は、ここに居ることの意味を確かに原因を生きるという、その実践の質の確認作業であり、その全てに支えられて、形あるもののその原因の次元を修正・浄化するのがテルルである。ここまで来たから満を持して動き出した、この数千年間の重石を外そうとする地球の意思。そのための流れは完璧である。

「再生」から「復活」へと EW が進む中、地球における必要性の次元は一気に高まり、生命たちは、後に多数となる歪な人間の世界から自由となって、地球の望みそのものとなる、記憶の中の生命の意思に主導権を握らせる。「復活」(6)と(7)は、その原因が形になる場所。経験が自由に歩み出し、身体は余裕でそれに連れ添う。

非生命的な原因を潜める存在たちの、その真を持たない感情に永いこと身体時間を付き合わせてきたことで、これからのために持つべきものと、外すべきものが容易に経験の域に収められる、現代。そのことで変わり出す未来へのこの時代の原因が、天体規模の原因を引き連れて行くことになる、この今の生命世界の揺り戻し。思考の次元を一切不要とする、人間本来のその姿無き原因の活力は、地球に託され、太陽系に見守られる生命たちの中で、普通感覚で具現化する。「復活」の基礎の部分から、外へ、上へと広がる時。

5. 人間は地球。体内には、地球の全ての原因と繋がる多次元的な融合の通り道が在り、身体時間の源となる地球の意思と心を重ねつつ、人は、この地で人間を生きる。地球の構成要素のあらゆる原因を元とするそこでの(人間仕様の)経験は、どこに居ても、どんな風でも、そのままで地球となる。

但し、それは地球自然界の自然な姿(変化)を大切にするという、その生きる基本形を動植物たちと共にあたり前とする人間にとってのもので、そうではない人間には当然それは当てはまらない。そのあり得ない負の事実が有るために、変化を滞らせて病むという、無くてもいい経験を手にする生命たち。やむ無くそうであるためのその負の原因の反映として、これまでの地球の歴

はなくなってしまったことへの感覚的把握と、それによるそれまでに無い原因の動きは、地上での全てを、自然で調和あるものにする。地球の外側にあるその原因への対処を、地球に託された人間が担い、人間の次元から、生命としてのその可能性を拡大させる。

6. この時代に生きていることに責任を覚え、その責任を地球感覚のそれとして、自然界が安心する生を普通とする時、生きる原因は自ずと変化に乗り、その精妙さと余裕(分母)は、そのまま限り無いものとなる。それだからこそ、自然に触れ得ることとなった、鉛に潜むその不穏な原因と、その元となる姿無き無生命化の意思。そこに在っても、何も分かり得ず、どんなに時間をかけても、一切の接点を持つことの出来ないその次元は、無有日記の変化の中で、ごく普通のことのようにその姿を顕にすることになる。

少しでも思考が先行すれば、どこまでも見えなくなり、感性に僅かでも感情が絡めば、何をしても永遠に分からなくなってしまふその姿(次元)は、形無き抽象の世界で、多次元的に暗躍する。そうであるから、思考を力に、動きの無い結果(過去)を生きる人の中でそれは活躍し、不安や怖れ(怯え、嫉妬)の感情を内に潜める(隠す)人の中で、大いに仕事をする。

鉛のその原因に在る非生命的な力は、それと融合する、重く流れない非人間性を普通とする人を元気にする。内なる(真の)変化を拒む人ほど、その姿勢は応援され、体裁を繕い、本音と建て前を上手く使い分ける人間のその嘘は、それにより力を付ける。鉛の、そこに在る形無き負の原因は、心無い人の健康の基

となり、心ある人の動きを止める重たい感情を持つ人に、安心をもたらす。

地を這う蛇の、その不自然な姿を想像してみる。元々地球には存在しなくても良かったその妙な生態と感情(本性)は、鉛の原因と密に繋がり、そこに無生命化の意思が通ることで、何もなくても自然界は重くさせられる。悲しいかな、この地では、神社を通して、多くの人がその蛇と関わり、鉛のような原因を備える存在となる。心ある素朴な人は、いつの時も、その本来を不自由にさせられる。

7.「太陽の音楽」「再生」と、そこでのひとつひとつの融合体験を経ての今があれば、この「復活(6)」に居る自分に、新たな原因の時を重ね合わせる。

余裕と安心を普通に、確かな想いで地球を元気にする。そのための何気ない実践を日常に、普通感覚で、地球の望みに応える。地球に託された仕事を、地球が残してくれた貴い原因を力に、楽しみながら表現する。そして、太陽を安心させる。

石灰石の原因の中に在る地球の意思を、自らに取り込む。それは、地球の切なる想いとその天体規模の知恵を未来に繋ぐということ。その通り道となって、地表を、地球本来のそれにすること。この地(地球)に人間が誕生したことの意味は、そのことで、その質(次元)を一気に成長させる。そして、地球と共に、天体たちも喜ぶ再スタートの時を迎える。これまでの原因の蓄積と人間としての実践は、この時の原因の創造に大いに活かされる。

石灰石との融合は、生命本来の、その芯の部分を力強くする。それだけで、動くもの。その上で、変わり出すこと。その様は、人そ

そのことは、この地が、太陽系の在り方にとってとても重要な場所であることを意味し、生命たちにとっても、彼らはそこに、無限の可能性を観る。地球の他の地域では成し得ない、生命としての原因の仕事。彼らにしか出来ない、天体規模のその原因の変化(進化)と創造。地球は、生命たちの実践と共に居て、ひとつとなり、その質を共に成長させていく。

無有日記の在るこの現代、その原因の意思は、どこまでも自由に、多次元的に時を透過し、時代の必要性を余裕で眺めつつ、対処し得る次元の質を変化に乗せる。そして、この時の訪れを機に、地球の望みと繋がる、形無きその原因の意思の反映となる形(知識)をここに案内する。それを以て、生命たちは、地球感覚の原因の力をより微細で力強いものへと変換させ、この地球でのこれまでの全ての出来事の、その原因の元となるところへとEWを伸ばし、それを普通とする。それに、太陽系も(月も金星も)反応する。

4、地球が、人間という生命を地上に招き入れた時、彼ら生命たちの中には、地球の意思(望み)を具現化させるあらゆる原因の通り道が在り、それを以て彼らは、地球を無生命化させようとする存在の動きに柔軟に対応し、その原因を変調(進化)させつつ、太陽系の中で地球が担う天体規模の責任と実践に、人間として付き合う。そのための全ての要素が整い、地球時間の(次元の)動きからその時の訪れを感得した生命たちは、この今に至る数万年という時代の総仕上げのような経験を経て、自らの中に在る、地球と一体化した無限能力のその普通の原因を、自然な形で動かし始める。

楽しむ。気づけばそうである変化は、そのまま確かな原因となる。

そして、当然の認識としてそこに在るのは、この現代においては、大多数に支えられるそこでの価値観は、その殆どがこの地球のためには無くてもいいものであるということ。その理由は「再生」にも在るが、動植物たちの普通と地球自然界の本来が抑え込まれたままこの今に至る、これまでを元とする価値観は、考えるまでもなく未来には持つては行けない。そこから自由になり、そこを離れたところでの普通を、地球は応援する。人間を生きるというのは、そういうこと。

その時地球は、人間が一生命としてより地球と融合し、その生命の意思を地球と一体化させるべく原因の創造に、更なる材料を差し出す。地球を通して、天体規模の動きを生み出し、太陽系をかつてのように調和あるものへとその変化の原因を新たにするために、世の常識を超える知識が意思表示し出す。当然と言えば当然のことなのだが、それは、大多数の次元を切り離す。ずっと何億年もこの時を待っていた地球が、人間を生きる生命たちに、これまでどこにも無かった(ずっと地球が守り続けてきた)新たな原因の力を与える。

3. 地球に託された数千の生命たちが再びこの地で人間を始めた時(「再生」)、そこには、すでに地球が創り出してくれていたそのためのいくつもの要素が在り、石灰石はそのひとつとなる。その他にもこの地(列島)には在り、それらは皆、地球規模の、人間発の変革の原因となるよう、彼らが人間を再開するまでの間に、(いくつもの変動を起こして)地球が用意する。

それぞれのこれまで(の原因)が反映されるものだけど、そこでの感覚的経験のその形無き働きかけは、余裕で常識の次元を超える。

ここに居て、これまでを経てのこの今だからこそ経験できる、その融合空間。そこに、地球が居る。ずっと何億年もの間この時を待ち望んでいた、彼の想いが在る。ひとりひとりが地球になる。

8. 人間にしか出来ないことをするために、人間としての生を経験し、人間だからこそ出来ることをして、生命としての原因の力を成長させる。地球が真を外さずに地球で居てくれたことで、地球のように真を生き、生命そのもので居続けた人間たちは、その経験の全てをここに繋ぐ。彼らは、地球を感じつつ、地球の外側からも地球を観、地球の望みと太陽系の普通を自らの中で生み出していく。

「再生」の時を経て辿り着いたこの時代と、更なる原因の創造に不可欠な、この「復活」の次元。そのことで、生命たちは、太陽のように、何もせずとも事を為し得る原因を自らに通し、地球のように、身体表現のその可能性を多次元的に高めていく。

原因の世界では、月が自転を止めるよりもずっと前から始まっていた、生命たちの普通。この時のために在ったそれも、ここからは、二度とそうではない(病むことのない)時のための、地球規模の原因にその姿を変える。天体たちも、安心して、本来の自分へと変わり得る新たな道(変化)に乗る。

生命は、変化そのもの。生き物たちは、そのことを基本に、共に生かし合い、自らの分を生きる。そこに、争いや衝突(攻撃)、隔たりや非生命を普通とする行為は無い。

復活(7)

それが、何億年もの間、壊れたままだった地球。それを修正・浄化しないまま平気で生き続ける、嘘の人間。その地球自然界に有ってはならないことが、ここで形となり、それを処理すべく時が始まった。それは、原因からの完璧な動きだから、何びともそれを阻むことは出来ない。すでにその中に居る。

石灰石との融合を前に、どんな重たい(否定的な)感情も、そのままではいられない。無有日記の原因により、どんな人も、自他の変化を止めることは出来ない。一切の計画も目的も無い(生命としての)原因のままの変化と創造は、全てが予定通り。その時までそうであることも分からず普通に歩み続けたこれまでが、この地球に託された生命たちの大いなる仕事となる。

「復活」の原因を力に、太陽系は、全く病んではなかったあの頃へと、新たな、何百万、何千万年の時を歩み出す。この地球では、生命たちの自然な姿が主導権を握り、土に還らない(地球に抵抗する)凶暴さや残忍さの次元は姿を消す。その時々の変わり様を余裕で眺め、それを大きく包み込む安心だけの原因で、いつの日か、月を回す(月に新しい子供服を着せる)。太陽も地球も天体たちも皆、笑顔になる。復活の時を、みんなで遊ぶ。
(by 無有 11/15 2018)

1. 生きることが、そのまま地球のためになる原因として無限の仕事をし続けるような、そんな普通を力強く安定させる。生きる基本を、自然界が安心する生命本来のそれとし、地球が嬉しい地球感覚を、その意識もなくあたり前に表現する。その材料となる無有日記。そうであるからここに居る、それぞれの生命の意思。人間は、求めず探さず、ただありのままにいるその原因の変化により、人間にしか出来ないことを、自然界と共に自然に行い続ける。

地球は、人間が地球規模の働きかけを可能とするその原因の成長のプロセスを全て把握していて、そのための材料となる経験と発想をきめ細かく支え、必要とすべくものを差し出し、重要な機会と形を演出する。地球のために始動させた、生命たちの人間時間。地球もそれに参加し、絶え間なく、その姿を支援し続ける。

石灰石は、そのための基礎となるもの。「再生」の時を経ての今だからこそ、それは更なる変化の時へと、ここで無有日記のEW と繋がる。石灰石との融合経験は、心の基本形を本来へと活躍させる。

2. 地球感覚を変化に乗せ、それを原因として自らの表現とその形無き影響力を成長させる時、知識レベルの経験は姿を消し、その原因が地球の望みと繋がる生命としての知識(の次元)だけが、その体験を担うようになる。無有日記を通して、人は、その気もなくその世界に居て、ふといつのまにか、「復活」の次元を